

## 支部長挨拶

(公益社団法人)日本気象学会北海道支部 支部長 佐々木 喜一

会員の皆様には、日頃より気象学会北海道支部の事業運営にご協力をいただきお礼を申し上げます。

私は、この5月19日に開催されました日本気象学会北海道支部理事会の推薦により第29期の支部長を仰せつかりました佐々木です。皆様からご支援・ご協力をいただきながら、北海道支部の発展のために微力ではありますが最善を尽くしたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。



さて、この数年を振り返りますと、我が国は、多くの自然災害に見舞われました。一昨年は全国的に台風による大きな被害が発生し、特に伊豆大島で大きな土砂災害が発生し多数の犠牲者が出てしまいました。昨年は、平成26年8月豪雨による広島市など、局地的な集中豪雨による土砂災害が相次ぎました。北海道でも昨年8月に礼文町で記録的な大雨による土砂災害、9月には石狩・空知・胆振地方に北海道で初めての特別警報の発表、12月には発達した低気圧による道東の暴風雪、根室の高潮災害などがありました。

とどまることなく進展する情報化社会の中で、自然における極端現象による災害を減らし、安全な社会生活を維持するため、気象・気候現象のさらなる究明と、予測精度の向上が求められております。

近年、雨や雪の降り方が変化している、温暖化で危惧されているような極端な雨の降り方が現実的に起きているといったことが言われています。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、昨年11月に最新の科学的知見をとりまとめた第5次評価報告書（統合報告書）を公表し、「気候システムの温暖化については疑う余地がない」ことを改めて示しました。そして、「将来にわたって更なる温暖化が進み、人々や生態系にも大きな影響を及ぼす可能性が高まる」と予測しています。こうした地球温暖化の進展に伴う地域レベルでの気候システムの変化や極端現象の発生などに関する研究も求められていると思います。

昨年10月に福岡で3日間に渡り開催された日本気象学会2014年秋季全国大会では、全国各地から多くの会員の方々がお集まりになりました。発表件数は一般講演172件、スペシャル・セッション160件、ポスターセッション220件と総数552件で、この件数は年々増加の傾向にあり、気象学への関心が高まっていることが伺えます。

日本気象学会は、公益社団法人と認定されて3年目を迎えました。今後もその趣旨に沿った活動として、分野の異なる研究者がそれぞれの力を学会という枠組みの中で出し合い、学術及び科学技術の振興及び気象学の進歩を通して社会へ貢献していきたいと考えおります。特に、広い分野・さまざまな角度からそれぞれが連携して研究、教育、応用を進めていくことは、気象学会のまとまりと、会員の裾野を広げるためにも重要であり、このような考えを念頭に、今年度におきましても、これまでの取り組みを引き続き継続・発展させたいと考えております。

また、学会員には大学等の研究者、気象サービス会社、市民の方など多様な方がいらっしゃいます。支部としてはWebの普及に的確に対応し、学会員の交流がさらに深められますよう、学会活動の情報交換や情報発信をしていく所存です。

会員の皆様には、益々のご配慮とご鞭撻を賜りますようお願いして、ご挨拶いたします。

(札幌管区気象台長)